

あとがき

是非出版までの経過を記録しておけとのことと不本意ではあるが一応書き残すことにいたします。

一同渾身の努力はいたしましたが大至力らずしてご覧のようなものにすぎませんでした。御期待に添い得なかったことについて心よりお詫びいたします。

原稿は当初各作戦毎に分担執筆することになっていましたが、大部は「始めたがとて手におえない」からと辞退され、宣昌作戦、江北殲滅作戦、付属要図、戦死者名簿、編制関係の外は全部責任上委員長のところへ廻って来てしまいました。

宣昌作戦は長澤良治氏が分担され、真剣にとりくみ二年がかりの努力により膨大なものになりましたが、全般の均衡上圧縮追加を重ね、幾度か書き直しの末内容等立派なものになりました。特に入隊間もない初年兵の行動記録は千金の重みをみせて当部隊の実力の基盤を表わし

ており、旗振りだけでは綱引きは絶対に勝てないことを物語っております。

江北殲滅作戦は山本昇氏が分担され資料不足を克服して執筆いただきました。

他の作戦分は足かけ三年満二年数ヶ月かかりました。

資料不足のためこの蒐集調査が大部分で一つの年月日を出すのに三日間を要した部分もありました。家人の寝静まった時が最も能率が上がるので朝二〜三時まで室中あつた地図この本等散乱している専用六畳の間で、久しぶりに三十数年前のあの苦しかった頃の情況に引き戻させていただきました。連日室中もうくとした煙草の煙の中「人間の燻製」ができるかと心配していた家人は遂に数ヶ月後痰咳併発により肺癌の疑いが大きいとて佐久総合病院への強制検診的一幕もありました。

南方機動、衡陽戦麻塘の乱戦前後及び終戦後の資料は未焼却メモによるものです。お寄せいただいた資料は全部大なり小なり使用いたしました。特に倉石正友氏の貴重な日誌は確度甲として宣昌、予南、浙東上陸、浙贛、新溝、江南の各作戦の日付等に活用させていたゞきました。

付屬要図は野堀達氏が分担され、本文に出て来る地名、主要都市等当時の呼称、用字で記入いたしました。本文が変更追加される度毎に改訂したり、次の作戦等によって記入しきれなくなつて何回となく書き直しの末五枚に分割いたしました。他の編集実務、原稿清書等と共に連日の奉仕作業に家族一同協力して御苦労いただきました。部隊の編制、名簿は本橋芳一氏の分担で、復員者名簿、近渡河会員名簿を基礎に各支部を動員して調査し、中には一人の確認を得るまでに数度の電話を要したのもありました。動員編成以来の住所不詳の人は氏名だけでも

登載するようにいたしました。戦歿者名簿は復員時の死歿者、行方不明者名簿と公文書現存死亡証書写等を資料として当時の係、高木眞三氏が途中病氣入院のため竹内鼎氏が替り分担調製いたしました。資料特に前半部のもものが不足のため記載洩れが多いためと思ひます。表紙は委員長長の構想により牧野剛氏が図案化し、更に独自に裏表紙を作り、内藤照演氏の印刷製本の技術的研究の結果ご覧のようなものになりました。清書等御苦労いただいた方々は次のとおりです。

章別	原稿	清書	校正	備考
表紙紙	小林惣治	牧野剛		
裏表紙	牧野剛	全		
写真真章	小林惣治	内藤照演	野堀達	原版一部森山茂・成瀬三千男
序章	全	野堀達		
宣昌作戰	長沢良治	全	野堀達	
漢水予南作戰	小林惣治	全	長谷川雅吾	
浙東上陸作戰	全	鈴木豊治	全	清書一部野堀達
一次長沙作戰	全	全	武内甚五	全

章別	原稿	清書	校正	備考
南方機動作戦	小林 惣治	武内 甚五	武内 甚五	
浙贛作戦	全 右	全 右	全 右	
新 溝	全 右	野 堀 達	本 橋 芳 一	
江北殲滅作戦	山 本 昇	全 右	全 右	
江南殲滅作戦	小 林 惣治	全 右	全 右	
常德作戦	全 右	全 右	全 右	
湘桂作戦前半	全 右	生 駒 正 雄	全 右	
全 右後半	全 右	外 山 英 雄	長谷川 雅 吾	
南部粵漢作戦	全 右	野 堀 達	全 右	清書一部野堀 達
芷江作戦	全 右	竹 内 鼎	全 右	
終戦より復員	全 右	野 堀 達	野 堀 達	
編制・名簿	本 橋 芳 一	本 橋 芳 一	本 橋 芳 一	
付属要 函	野 堀 達	野 堀 達	野 堀 達	
戦歿者名簿	竹 内 鼎	竹 内 鼎	本 橋 芳 一	原稿一部高木眞三
寄付者名簿	本 橋 芳 一	本 橋 芳 一	全 右	予約金、寄付金保管管理
装 幀	内 藤 照 演			

編集会議は委員の方々が各々遠地に分散され経費も全くなく全部自費によらざるを得ないので招集も意の如く

ならず、編集実務は電話連絡等により、主として本橋芳一、武内甚五、野堀達の三氏が骨幹となって進めて参り

ました。特に本橋芳一氏は全体の取まとめを委員長にわかって努力し、数回の会議も全氏の清里の山荘を使用し、宿泊食費等総て全氏負担、諸連絡のための電話料、郵便料等も相当莫大なものになると思いますが、主として前記の三氏が奉仕され、有形無形の御負担は計り知れないものがあります。数回に亘り連絡のため千葉、東京より自動車を駆って長野までの御来訪には恐縮いたしました。印刷は内藤照演氏の分担で専門知識をフルに發揮され、後代に残せるものを計画し、同氏経営の中央印刷株式会社に依頼し、部数僅少のため「きずもの受注」として会社幹部に気遣いなされ乍ら特別価格で御引受け願ひ出版の運びになりました。特に製本装幀は同氏の御発意によるものです。

各県の支部長には予約勧誘、部数の取まとめ、寄付金の募集、配本等を分担され、各々滞りなく進めることができました。特に寄付金募集は予期以上の金額と、予想以上の応募人数にのぼり分譲価を減額することができました。特に予約勧誘並に募金に努力なされた本橋芳一氏、武内甚五氏、長谷川雅吾氏他に感謝するとともに、応募者各位の御芳志に対し謹んで厚く御礼申し上げます。

御苦労をいただいた現在の支部長は次のとおりです。

東京都支部長	本橋芳一
神奈川県支部長	友田 仁
山梨県支部長	渡辺 一
千葉県支部長	市川承次郎
埼玉県支部長	安藤正二
茨城県支部長	長谷川雅吾
長野県支部長	山本 昇

この戦争の従軍記も人によって当然各種各様のご批判があろうかと思いますが、中には一生の宝物視している人もあります。数は少ないかもしれませんが、その人達の宝物の造成に我々一人々々心血をそそぎ、物心共に最大限の努力を傾倒し御奉仕させていただいたことに対し一同心より御礼申しあげます。ただ力及ばずして内容これに伴い得なかつたかも知れませんが、形示上の点を御取り上げ願ひ御寛容の程お願いいたします。

隊史編集委員会	委員長	小林惣治
	副委員長	山本 昇
委員	(五十音順)	

五十嵐六藏

市川承次郎
佐藤不二男
高島重吉
武内甚五
内藤照演
成瀬三千男
野堀 達
長谷川雅吾
藤城 博
本橋芳一
渡辺 一
(文責 小林)